



ホワイトハウス近所のラテンアメリカ、米州開発銀行

中村 圭介

**1300 New York Avenue,
NW Washington D.C.**

私の勤務する IDB（米州開発銀行）はその名の通りラテンアメリカ、カリブ地域の経済社会開発を支援するために設立された開発金融機関である。同じ様な目的を持って設立された機関としては、ADB（アジア開発銀行）がある。IDB 本部で長く勤務したというとよくラテンアメリカのどの国にお住いでしたかとか、長くラテンアメリカで生活されたのですかとか聞かれる。確かに ADB の本部はフィリピンのマニラにあるので、

IDB の本部はペルーのリマとかブラジルのサンパウロにあるものと思われても不思議ではない。しかし IDB の本部は米国の首都ワシントン DC の中心部にあり、ここに筆者は近郊バージニア州から 26 年近く通勤していたので、恥ずかしながらラテンアメリカでの滞在生活は経験していない。

はじめに言葉ありき

IDB 本部はホワイトハウスから 3 ブロック離れたところにあり、周囲には米国の政府官公庁が多くある地区に位置しているが、本部

ビルに一步足を踏み入れるとそこはまさにラテンアメリカなのである。本部勤務の職員の半数以上そして受付やカフェテリアで働く人の大半はラテンアメリカ出身者なので、ビルに入った途端聞こえてくるのはスペイン語である。IDB の公用語は、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語の 4 か国語である。加盟国を代表して常駐している理事で構成される理事会では、この 4 つの言葉いずれを使ってもいいので、必ず同時通訳が付けられる。では事務方の部内の会議はどうかというと、大抵の場合はスペイン語と英語とが使われ、往々にしてスペイン語だけになってしまうことが多いのであるが、ここでは同時通訳は付かない。そのため、採用にあたってはスペイン語と英語のバイリンガルであることが求められている。もちろんスペイン語が流暢でなくとも専門分野での知識、経験が豊富であれば、IDB で勤務することはできるし、職種によっては、例えば財務経理関係では英語だけで仕事はできる。しかし IDB ではスペイン語は仕事をするための単なる道具ではない。IDB の設立経緯を辿ると、そこで働くスタッフの仕事の目的とするところは、ラテン



IDB 本部ビル外観（写真はすべて執筆者撮影）

アメリカの経済社会の発展を支援し、そこに住む人々の生活を豊かにしていくことである。そのためにはラテンアメリカの人々の考え方、社会のあり方をこれらの人々と同じ目線で捉え、そして同じ感情で理解することが必要である。非スペイン語圏の出身者にとってはスペイン語が理解できて喋ることはここで働く上での第一歩であり、スペイン語で考えることができるようになって一人前の職員ということになる。

会議は踊る、メレンゲ、サンバ、そしてクンビア

米国にあっても IDB 本部でのビジネスの流儀はラテンスタイルである。みなさんよくラテンスタイルというと会議が時間通りに始まらないということを思い浮かべられるであろう。確かに10時から開始という会議は、大抵10時ぴったりに始まらない。しかし IDB 本部でいうラテンスタイルとは、会議の進め方、参加の仕方である。日本では、会議というと議題があらかじめ設定され、参加者は各々事前に準備をして資料も整えて、余計な事や議題と関係ない事は発言しない。またある人が発言しているときに割り込んで、話を乗っ取るということもない。設定された議題から逸脱しない様に議論が進められて、最後には何らかの結論が参加者全員で共有される。

さて IDB 本部での部内会議であるが、一応議題が設定されていることは多いのだが、議論が始まると議題とはほとんど関係ないコメントや提案がなされることがしばしばあり、また人が喋っていても平気で割り込んで話

を乗っ取る輩がいるのである。別にこれは悪意でやっているのではなく、とにかく会議では発言することが重要（参加することに意義がある）、いろいろな意見が出ることはいいことであるということなのである（私はよくこういう状況に遭遇した時、Let Hundred Flowers Bloom と茶化していた）。このスタイル、よく言えば自由闊達、創造的な議論ともとれるが、普通の日本人から見るとカオティックで一体何を議論しているのかと映るだろう。筆者も IDB 本部で働き始めた頃はこのスタイルに戸惑い、会議でほとんど発言できずに終わることも多かった。当時、上司が気を利かせてくれて、「ところで君の意見は？」と向けてくれてやっと発言することがしばしばあった。ところが、郷に入るとは郷に従えとはよく言ったもので、今ではすっかりこのスタイルが身についてしまい、日本で会議に参加するときには日本スタイルにするようところがけている。

ラテンアメリカ在職員食堂

IDB 本部で勤務したり会議に参加しなくとも、いるだけでラテンアメリカを体感できる場所がある。それは IDB が誇るカフェテリアである。カフェテリアはビルの7階にあるが、IDB 本部ビルは元々ホテルとして建てられたもの



カフェテリアテラス席

のなので、一階ロビーから12階まで吹き抜けになっており、7階カフェテリアの一部は天井が12階までない開放感のある明るくて広いテラスとなっている。このテラスに座っているだけでどこかラテンアメリカのリゾートにいる様な気分になる。しかしカフェテリアの自慢はこのテラスだけではなく、そのメニューである。日替わりの定食メニューは、例えば海鮮炊き込み御飯（アロス コン マリスコス）とかのラテンアメリカ料理であり、ラテンアメリカに行ったことがある方はご存じのロティセリ チキン（ポージョ アラ ブラサ）は毎日ローストミートのステーションで提供され、サンドイッチステーションではローストポーク、ハム、チーズのキューバ風サンドイッチがあり（キューバは IDB 加盟国ではないが）、グリルステーションでは、ププサ、ブリートが、さらにスナックで済ませたい人には、数種類のエンパナーダスも販売されている。デザートには、もちろんアロス コン レーチェやアルファフォーレスがある。ラテンアメリカに行かずとも、各国の郷土料理や庶民の味を IDB カフェテリアでは楽しむことができる。というわけで、連日カフェテリアは大繁盛ある。IDB では昼食の時間が一斉に決まっているわけではないので、12時に大混雑ということはない。ランチの時間も極めてラテン的で一番混雑するのは午後1時過ぎである。そしてランチはネットワーキングの機会でもあるので、午後1時ごろからテーブルがどんどん埋まっていき、あちらこちらでランチをとりながらのネットワーキングが行われている。さて4年

に一度カフェテリアはとても重要な場所となる。ラテンアメリカのスポーツといえば、野球ではなくサッカーである。そう4年毎に開催されるFIFAワールドカップの期間、カフェテリアには大型のモニターが数台設置されて全ての試合が放映される。またこの期間、加盟国のチームが試合がある日にはその国の料理が特別メニューとして加えられる。職員、その家族、友人もウェルカムで、みんなそれぞれ自分の国のチームのユニフォームを着て、サポーターとなりほとんどスタジアムにいるのと同じ様な熱狂に包まれて観戦するのである。



カフェテリアフード。手前がアルファフォーレス

華府二都物語

ワシントンDC（華府）と隣接する、4つの郡（バージニア州アーリントン郡、フェアファクス郡、メリーランド州モンゴメリー郡、プリンスジョージズ郡）を併せてワシントンDCメトロポリタン地域と呼ばれている。ワシントンDC市内で働く人の大半はこの地域に住んでおり、総人口は約300万人である。もちろんIDB本部に勤務する職員の多くはモンゴメリー郡、フェアファクス郡に住居をかまえている。総人口の4分の1弱にあたる約70万人はヒスパニックであり、白人に次ぐ数となっている。彼らの多くは、建設関係、住宅設備施工、造園業、ビ

ル清掃業、配送・運送業、飲食店の配膳といった低賃金のサービス業でのブルーカラーの職業に従事している。庭の芝刈りを頼んだり、ちょっとした住宅の修理を頼むと、作業にやってくるのは大抵ヒスパニックの人たちである。IDB本部で午後7時近くまでオフィスに残っていると掃除が始まるのに出くわすが、オフィス清掃等はサービス会社に外注されており、清掃の作業をしている人の全てがヒスパニックである。もちろんみんな英語は理解するが、大型のゴミを出したり、大量の書類を廃棄する際には、ゴミであることを明確にしておくために“Basura（ゴミ）”と表示している。何か清掃をしてくれる人をお願いをしたり、感謝の言葉をかける時にスペイン語を使うと、笑顔が広がり、反応が全く英語で話しかけた場合と異なるのである。筆者の様にアジア系の人間がスペイン語ができることがわかったと、ペルー人か（アジア系でスペイン語を話すとペルー人と思われることが多い）とか、どこでスペイン語覚えたのかと話しかけられて思わず話し込むことがあった。IDB本部に勤務する職員の60%以上はラテンアメリカ出身であり、米国のセンサスでは、ヒスパニックということになり、ワシントンDCメトロポリタン地域に住む約70万人のヒスパニックの中に含まれているはずである。しかし、IDBのスタッフとIDBのオフィスの清掃に従事している人とは、仕事の内容はもちろん、住んでいる地区、教育水準、所得、そして母国での出身階層も全く異なるもので、別な世界の住人といっても過言ではないだろう。ある時親しくしているラテ

ンアメリカ出身の同僚に「君は自分がヒスパニックだと思うか？」と質問したところ、一体何を質問しているのだという様な怪訝な表情をした。彼を含め、ラテンアメリカ出身のIDBスタッフの多くが、自分たちはビルの清掃をしたり、レストランで配膳をしたり、そしてニュース等で不法移民の取り締まりの対象になっているヒスパニックとは同じコミュニティに属していないと思っている。では、ビルの清掃をしている人たちは、同じラテンアメリカ出身ではあるがオフィスでコンピューターに向かって仕事をしているIDBスタッフのことをどう見ているのであろうか。彼らのこの問いへの答えの中にラテンアメリカが未だに抱える大きな課題の一つである不平等、格差の拡大を解消していく道へのヒントがあるのではないだろうか。ラテンアメリカで存在する不平等、格差はそのまま米国ワシントンDCにあるIDB本部にも実は存在しているのである。灯台下暗しではないが、同じビルの中で清掃等に従事しているヒスパニックの人々がどういう事情で、何を求めて米国にやって来たのか知っていくことが、IDBのミッションであるラテンアメリカ・カリブ地域の経済社会開発を支援し、そこに住む人々の生活向上を達成していく重要な一歩になるのではないかと、本部を離れて見て思う今日この頃である。

（なかむら けいすけ IDB（米州開発銀行）
アジア事務所長）